



で目を引こうとか海外旅行用ならパスポートが入る隠しポケットを作りましようとか。お客さまの好みやTPOをお聞きして作った服は、着る人の個性をきちつと引き立てるものです。」

「丸くなれ」と念しながらアイロンをかけて形を固定する。「丸い部分は丸く作る。でない」と服じゃない。へつたんにプレスされた服は、預かってアイロンをかけ直します。」

「今思えば、若い頃は技術だけで作っていました。おごってたんです。今は一針ずつ、心を込めて縫っています。」

技術と誇りを持たなければ、職人ではない。しかし謙虚でなければ、職人と呼ばれる資格はない。布を見つめる畠山さんの厳しくも優しい眼を見て、そう思った。



プロフィール
はたけやま しげる
 昭和10年、横浜市に生まれる。中学卒業後、市内の洋服店に「稚奉公」、5年修行して1年お礼奉公が普通の当時に、技術習得後も世話になつた店の主力職人として活躍。12年間勤め上げた末、昭和38年に独立し「テーラー・シゲル」創業。昭和51年一級紳士服技能士。平成8年、初代横浜マイスターの称号を受ける。平成14年度、現代の名工に選ばれる。

職人の技

シリーズ⑧

紳士服仕立技術者

(有)テラー・シゲル
畠山 滋さん

服を作る。これはおそらく、人類史上もつとも古い技術のひとつだろう。安い既製服と、ボタン付けもできない人があふれる今、仕立技術は、もっともクールな技術でもあると思う。日本有数のテラーを、横浜に訪ねた。

「私が小学校に上がる時、母が入学式に着せる服がありませんか」と相談すると、父は「心配しなくていいよ」と自分の背広をほぎ、私の服を縫ってくれたそうです。父は銀行員だったのに、そんな技術をどこで憶えたのか。私の中にも、きっとその血が流れているんですよ。」

畠山さんは、中学を出るとDNAに従って横浜の洋服店に入社、修行は掃除や行儀見習いから始まった。

「やがて仕付け打ち、それからボタン六のかがり縫いとか袖のまつり縫いとか少しずつ任せてもらえるようになる。あれは入って3ヶ月目くらいでしたか、店で余っていた布で半ズボンを仕立てる練習をしていました。親方に見つかって、たえ余りでも、布は店のものだから勝手に使っちゃいかん」と怒られましてね。シモンとしていると「そんなに縫いたいのか?」と親方がたずねるので、「はい」と勢い込んで答えました。しばらくして、白の綿ギャパン生地を親方がくれました。ズボンを縫ってみな。って。うれしかったねえ。」

洋服の場合、新人はズボン、チヨキ、上着の順で経験していく。構造の単純なズボンに對し、上着は240ものパーツを持ち、640に及ぶ工程を経て仕

上げられるという。

「洋服づくりは、大きく採寸型紙起こし、裁断、仮縫い着せ付け、芯づくり、本縫い、という工程が進みます。よほど不器用でなければ、5年ですべて身に付きますよ。」

もたせようとか、体型をカバーして、なおかつ美しく見えるものを作るのが私たちの仕事。でなけりゃ、既製服と同じになっちゃう。」

注文服の仕立屋を、英語では「ビスポーク・テイラー」ある

若い頃は、腕で縫っていた。
今は一針に心を込めて縫い上げます。

そう、本当の仕立て技術は、実は断つ・縫つの先にある。それは、着る人にどこまで寄り添えるか、という心である。

「寸法には出てこない体型というのがあるんです。猫背、鳩胸、いかり肩。そういう特徴を探寸の時に把握して、この人は猫背気味だから背中に余裕を

いはビスポーク・ドレスメイカー」と呼ぶ。古英語で、話しかける」という意味の言葉だ。その通り、服は会話によって作られるのだ。

「どんな場面でもどんな目的で着る服なのか。たとえばリクルートスーツなら、流行の3つボタンでなくあえて2つボタン

文 = 篠塚義成
text: Yoshinari Shinozuka

写真 = 林 泉
photo: Izumi Hayashi

